



Title	羽田圭介『スクラップ・アンド・ビルド』における尊厳死の表象に関する一考察
Author(s)	野崎, 泰伸
Citation	医療・生命と倫理・社会. 2016, 13, p. 43-56
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/57397
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

羽田圭介『スクラップ・アンド・ビルド』における

尊厳死の表象に関する一考察

野崎 泰伸

(天理医療大学医療学部非常勤講師、倫理学・障害学)

はじめに

本論文は、平成 27 年上半期、第 153 回芥川龍之介賞受賞作となった羽田圭介の『スクラップ・アンド・ビルド』(以下『スクラップ』と略記)のなかで描かれる表現法を考察する(1)。「新卒で入社した会社を自己都合で退職し、資格試験の勉強をしながら就職活動をしている 28 歳の健斗が主人公。就職活動をする一方で、母親とともに同居している 87 歳の祖父の介護をしているが、要介護ながらまだまだ健康体の祖父に対して健斗と母はストレスを感じている。そこで、健斗はわざと過剰に世話を焼くことで祖父を弱らせようとする。彼女とも交際しながら、介護と就職活動の日々を送る無職青年の目を通して、“死への希望”と“生への執着”を同時に持つ祖父の姿がおかしみとともに描かれている」(2)。おおよそのあらすじはこのようである。

本論文は、作品論ではないため、作品内容の解釈やそれに対する評価はしない。本論文の関心は、『スクラップ』のなかに用いられる表現が、いかに社会的な価値観を投影しているものかを示すことにある。そこで本論文では、『スクラップ』における引用文それじたいが、どのような社会的な価値観と結びついているのかを明らかにしようとする。作品論ではなく、作品中における表象に関して考察していくことになる。そして最後に、このような作品が芥川賞を受賞するに至る社会的背景について考える。

第 1 章 『スクラップ』にみる尊厳死に関する表象

本章では、『スクラップ』のなかに現れる尊厳死に関連するような表現を抽出したい。先にも述べたように、本論文は作品内容に直接触れることはしないので、物語の時系列に沿って羅列するのではなく、表現の意味内容によって分類することとする。

1 祖父の言葉——「迷惑かけるから、死にたい」

まず、祖父の言葉は、「自分は何もできず、馬鹿になってしまった。周りに迷惑をかけ、邪魔になるから、死んだほうがよい」というものに集約されると言ってよいだろう。

「もう、毎日身体中が痛くて痛くて……どうもようならんし、悪くなるばあつか。よかことなんかひとつもなか」

「早う迎えにきてほしか」

「もうじいちゃんなんて、早う寝たきり病院にでもやってしまえばよか」

「健斗にもお母さんにも、迷惑かけて……本当に情けなか。もうじいちゃんは死んだらいい」

「じいちゃんは邪魔やけん部屋に戻っちょこうかね」

「じいちゃんなんか、早う死んだらよか」

「すまないと思っとる。じいちゃん、早う迎えの来てくれることば毎日祈っとる」

「寝たきりにならんごと、毎日こん家の中ばぐるっと杖ついて歩いちょつとけどねえ。杖つく音のうるさかし、邪魔にもなるけん、だあれもおらん時に歩きよる。けど今日はしゃむくて痛くてねえ」

「どこか外に泊まりに行ってももう何がなんだかわからん。だからやろか、血圧も三日間ずっと高かった。そいけど家に戻ったら健斗やお母さんに迷惑かけるだけやし、じいちゃんは馬鹿になってしもうたけんもう早う死んだらよか」

「じいちゃんはもう死んだらよか。早く迎えが来てくれることば祈っとる」

「自分のことがなあんもできんごとなったら終わりやね。でも、なかなか迎えに来てくれん」

「ペースト。あとはなんやったろか……いっちょん思いだせん。もうすっかり馬鹿になってしもた。じいちゃんもうダメね、早う死んだらよか」

「早う迎えにきえほひか」

「もういっちょんわからん……じいちゃんはすっかり馬鹿になってしもた。死んだらよか」

2 健斗の視線（1）——「ただ生きている」だけの苦しみ

『スクラップ』は、一貫して孫の健斗の視線に沿って描かれている。つまり、健斗の視線こそが、『スクラップ』の作品性を決定づけると言ってもよいだろう。本論文では、この健斗の視線を3つに分解して考えたい。1つ目は、「ただ生きている」だけの苦しみ」でも呼ぶべきものである。そして、その状態から祖父を解放するために、「自発的尊厳死」が企まれるのである。

「ただ漫然と時間をやり過ぎさなければならぬのは、生き地獄そのものだと健斗は思っ

た」

「今かかっている病院では、循環器系に作用する最低限度の薬さえ飲み続けていれば健康でいられると言われている。つまり、八七歳という年齢からすれば、祖父はいたって健康体なのだった」

「本人にしかわからない主観的な苦痛や不快感だけは、とんでもなく大きいのだ。現代医学でもやわらげようのない苦痛を背負いながら、診断上は健康体であるとされ、今後しばらく生き続けることを保証されている。祖父が乗り越えねばならない死へのハードルは、あまりにも高かった」

「自分は今まで、祖父の魂の叫びを、形骸化した対応で聞き流していたのではないか。昼も夜もベッドに横たわり、白い天井や壁を見ているだけで、自分が昼間途切れがちに眠っていることも意識できないほど白夜の中をさまようようになれば——良くなりほしくない身体とともに耐え続けた先にも死が待っているだけなのなら、早めに死にたくもなるのではないか」

「死にたい、というぼやきを、言葉どおりに理解する真摯な態度が欠けていた」

「塗らなくてもいいワセリンや塗り薬を全身のあちこちに塗ることで、絶望的に退屈な時間を毎夜やりすごそうとしている。本当に辛いだらうと健斗は思った」

「四月の初旬、今日はかなり暖かい。おまけに、うまくいっていないながらも衣替えという大仕事に取り組んでいる。つまり今日はたまたま、祖父の肉体的苦痛が紛れ、やることがないという精神的地獄から逃れられる日なのだ」

「目の前にいるのは、三六五日のうち三三〇日以上「死にたい」と切に思い続けている老人なのだ」

「延命医療が発達した今の世では、したいことなどなにもできないがただ生き長らえている状態の中で、どのように死を迎えるべきかを自分で考えなければならなくなってしまった。ほとんどの人は昼も夜もない地獄の終わりをただじっと待つしかない。それは長寿の現代人にもたらされた受難なのか。目の前にいるこの小さな祖父一人にそれを担わせるのはあまりにも酷ではないか」

「健斗は摘便がどういうものか知っている。被介護者のアヌスに介護者が指をつっこみ、宿便を取り除く行為だ。『する』のは誰か。母と健斗の二択の場合、同性である健斗になるだろう。祖父の身体が摘便が必要なほどポンコツになる前に、早く尊厳死願望の片をつけなければならないと健斗はあらためて思った」

「自室へ戻った健斗は、祖父の尊厳死願望を確認すべく、眠くもないのにベッドへ仰向けになる。蛍光灯に照らされた白い天井や壁しか見えない。祖父になりきるのは一五分が限界だった。病院やデイサービス施設以外に外出もできず、この閉塞感が生きている間中ずっと続くのか。こんなに辛いのなら、祖父が早く死にたがっていることに間違いはないと健斗は確認できた」

「祖父は苦痛や恐怖のない死を求めている。孫としてそれを助けなければならない。色々なものが隔世遺伝しているとして、自分もいつか延命医療のもっと発達した世界で同じ挑戦をするのだろうか。それとも、祖父とは血の繋がっていない亡父のように、若くしてぽっくり逝くか」

「苦痛のない死を、自分の意志でつかみとってくれ」

「肉体が弱り、それに連動し可視化・数値化できない苦痛もかつてないほど高まっているのは確かで、つまり、苦痛のない死を願う祖父のモチベーションもかつてなく高まっていた」

3 健斗の視線（2）——尊厳死と社会保障との関連

健斗は、社会保障や高齢者介護・医療政策についても気にする。曰く、祖父のような者を生かすために、社会保険を払う必要があるのかということである。同時に、プロの介護は、健斗が祖父を死なせるために行う「足し算の介護」ではあるが、介護等級を上げて行政から施設へ支給される金額を上げるためだとも言う。健斗のような優しい気持ちをもって、祖父のような者を苦痛なく死なせたいのである。2つ目としては、尊厳死問題と公的保障、それに優しさが絡み合ったものとしてまとめる。

「自室で健斗は、祖父の願望である尊厳死をかなえてやるべくネット検索した。介護疲れに困り果てた諸先輩方による老人の死なせ方のハウトゥー情報には出くわしたものの、ほとんど自殺幇助罪に抵触してしまう陰惨なものばかりで、健斗が求めているものとは違った。全世界に老人はごまんといっただけの情報社会になっているというのに、老人に穏やかな尊厳死をもたらしてやるための現実的手段についての情報がない。姥捨て山など見つからないし、安楽死を認める国に帰化させても、不治の病にかかっていることや本人の意思、そして医師の判断がなければ安楽死は許可されず、ハードルは高かった。不必要な薬を投与しまくる病院に入院ないし通院させるのが最も現実的に思えたが、健斗には薬学の知識や病院の情報もない。ネット情報を教材に、薬や法律について今日も少し勉強した」

「プロの過剰な足し算介護を目の当たりにした。健斗は不愉快さを覚える。被介護者への優しさに見えるその介護も、おぼつかない足どりであらゆる年寄りに仕事の邪魔をされないうための、転倒されて責任追及されるリスクを減らすための行為であることは明らかだ。

手をさしのべず根気強く見守る介護は、手をさしのべる介護よりよほど消耗する。要介護三を五にするための介護。介護等級が上がれば、国や自治体から施設側へ支給される金の額も上がる。健斗とやっていることは同じだが、動機の違いからして似て非なるものだった。所詮、労働者ヘルパーたちは自分たちが楽に仕事をこなすために「優しさ」を発揮するだけで、被介護者自身の意向にそったケアをしていない。生きたい者にはバリアを与え厳しくし、死にたい者にはバリアをとり除き甘やかすというふうに、個別のやり方を考えるべきだろう。表面的には同じでも、自分が楽をしたいからなんでも手伝うのと、尊厳死をアシストするために葛藤を押し殺して手伝うのは全然違う。本気で死にたがっている被介護者を見極め、車いすに乗せ、漫然と一律提供している食事からありとあらゆるたんぱく質を排除し歩行能力を完全に奪い、第二の心臓とされる脚の筋肉を弱める徹底ぶりが感じられない」

「サロン代わりに通院している老人たちは一割から三割だけしか医療費を負担せず、残額を負担するために現役世代がおびただしい額の税金を徴収される。健斗自身の祖父も些細なことではしょっちゅう通院をせがみ、国庫や健斗たち世代の貯蓄を間接的に蝕んでいた」

「同じ車両の遠くの位置で、ドアによりかかり立つ老男性に気づいた。棒状の手すりにつかまっていることから、ある程度は身体の支えを必要としている年輩者だとわかる。もうすぐ下車するのかもしれないが、健斗としては二重にも三重にも迷った。ここで自らの席を老人に譲るのは、優しさだ。しかしあの老人がまだ元気に生きたいのであれば、席を譲る行為は本人の足腰を弱らせることにほかならない。真に相手のことを思うと席を譲れない。亜美たち大多数の乗客のようにただ自分の席を守りたがっている利己的なメンタリティーと変わらないように見られてしまうのが、行為の裏側にひそむ己の優しさを見せられないのが、健斗としてはものすごく歯がゆかった」

「チャンネルを切り替えた先の公共放送で、国民年金不払い者増加のニュースが報道された。健斗と同世代である二〇代の実に五割が、国民年金保険料を納付していないのだという。それを健斗は初めて知った。正確にいうなら、ニュースとして初めて気にした。現在無職の身でありながら、口座引き落としで国民年金保険料も国民健康保険料も、律儀に払い続けている。テレビでは、年金システムが破綻し高齢者の生活がままならなくなるおそれがあるという高齢識者の見解が述べられていた。だから将来年金を受給できるかどうか分からない若者も今の年寄りを労るため身銭を切ってちゃんと保険料を納めろということか。途端に健斗は怒りにかられた。今まで衆参両議院選挙や都議会議員選、都知事選といったすべての選挙で真面目に投票してきた健斗だったが、そんなことをしている場合はなかったと気づいた。投票より、国民年金保険料不払いのほうがよほど直接的な作用をおよぼす政治的行為だ。自分は老人や老人的なシステムをただ生かすだけの今の政治に不満を抱いている。健斗は月曜にでも国民健康保険料の支払い方法だけ現金払いに切り替え、残る国民年金保険料引き落とし用の口座から預金を全額引き上げることを決めた」

「デイサービスで午前中に行う運動プログラムは祖父にとっても甘すぎる程度のものだが、運動させないに越したことはない。少なくとも無職でいる期間中の国民年金保険料不払いという政治的行為をとり始めた健斗は、福祉に関してもあまり国に頼る気になれなくなった。デイサービスを利用すればそれだけ行政に費用を負担してもらうことになる。自分が保険料を払わないのだから、自分の身内の始末くらい自分たちでどうにかするのが道理だろう。もちろん就職できたら自動的に厚生年金保険料を納めるし、国民健康保険料は払い続けていることから、範囲と期間の限定されたプチャナーキストに過ぎなかったが。健斗の中にある、老人世代のクレジットカード利用の支払い役を担わされてたまるかという憤りと、自分が今祖父に対し行っている援助行動はきれいな繋がりをみせていた。穏やかに死にたがっている老人たちの手助けをすることは、老若双方にとって利害が一致している。全世界的にそろそろ、宗教的理由や形骸化したヒューマニズムで誤魔化さないで、見たくないものを直視し実行に移さなければならない時期にさしかかっているのではないか。祖父の困難な願いを本当に叶えてあげられるかなど健斗にはわからないし、叶えたところで自分も疲弊するだけでその成功譚が他者に理解されるかどうかともわからない。しかし必死にあがくうちに生まれる希望の芽は、自分の知らぬところで花開くはずだと健斗は信じている。闘いが長びき、老人を尊厳死させる革命戦士たる自分がいつか老人になってしまい白い壁や天井を眺めるくらいしかやることがなくなったとき、もっと若い世代が穏やかに殺しに来てくれれば本望だ」

「健斗の入室に反応した老婆がしばらく大きな声でわめいたが、カーテンを閉めしばらくすると静かになった。老人は皆、示し合わせたように同じ言葉を口にするものなのか。大声を発する元気のある斜め向かいの老婆はまだしも、このフロアには、祖父と同じように全身チューブだらけの延命措置を受けている、自然の摂理にまかせていればとっくに死んでいるであろう老人たちの姿しかない。苦しみに耐え抜いた先にも死しか待っていない人たちの切なる願いを健康な者たちは理解しようとせず、苦しくてもそれでも生き続けるほうがいいなどと、人生の先輩に対し紋切り型のセリフを言うしか能がない。未来のない老人にそんなことを言うのはそれこそ思考停止だろうと、健斗は少し前までの自分をも軽する。凝り固まったヒューマニズムの、多数派の意見から外れたくないとする保身の豚が、深く考えもせずそんなことを言うのだ。四六時中白い壁と天井を見るしかない人の気持ちだが、想像できないのか。苦しんでいる老人に対し「もっと生きて苦しめ」とうながすような体制派の言葉とは今まで以上に徹底的に闘おうと、酸素吸入の音を聞きながら健斗は固く誓った」

「だいたい老人の性欲とはいったいなんなのだ。子孫繁栄のためなら、死んで下の世代への負担を減らすほうが、よほど子孫繁栄に繋がる。ここでも、子孫繁栄を願う祖父の性欲と、健斗たち世代が繁栄するための尊厳死アシストは繋がりをみせている。未だ性欲を隠しもっていた老人をあの手で送る援助行動は、子孫繁栄を願う老いた性欲野郎にとっての本望でもあるわけだ」

4 健斗の視線（3）——祖父の「甘え」と死のほう助

健斗は、祖父を「ただ生きている」だけの苦しみから解放しようと、友人の助言を受け、過剰な介護を与え、筋肉を使わずに廃用化させ、そのことによって穏やかな死へと誘おうとする。そこでは、「死にたい」と言いながらも家族にいじらしく甘える祖父の姿と対照的に、健斗のストイックさが描かれる。健斗自身の自発的に健康へと向かうために努力する精神性と、そこに潜む怠惰なものへの異様なまでの嫌悪感が見て取れる。3つ目は、そのような健斗の視線である。

「薬漬けの寝たきりで心身をゆっくり衰弱させた末の死を、プロに頼むこともできない苦痛や恐怖心さえない穏やかな死、そんな究極の自発的尊厳死を追い求める老人の手助けが、素人の自分にできるだろうか」

「体調がそれほど悪くない日は、寝たきり防止として日中に家の中をぐるぐる歩き自主的リハビリに励んだりもするが、ソファーやダイニングから台所までの二、三メートルの移動は本当に嫌がる。リハビリはよくて、実務としての歩行はだめなのだ」

「血縁者故の際限ない甘えに、慢性的な苛つきは頂点に達しつつあるようだ」

「後期高齢者の介護生活に焦点を絞った場合、おそらく嫁姑間より、実の親子のほうがよほど険悪な仲になるのではないか」

「この家で三年面倒を看ている母のストレスが臨界点を突破してしまえば、すぐにでも長崎の特別養護老人ホーム入所の予約手続きがとられるはずだ」

「自宅入浴時、湯温を高めにし、脱衣場の気温を極端に下げしておくことで祖父の願いを一思いに叶えてあげることも健斗は当然考えた。だがそれでは健斗が間接的に殺すことになってしまいうし、なにより、苦痛のない穏やかな死という理想型から遠ざかる」

「二階から一階へ降りるそれだけの高さでも、身を投げればじゅうぶん死ぬ。他にも高所や電車の踏切、川と、冥界への入口は近くにいくらでもある。一瞬の苦痛に耐える勇気一つあれば、なんの準備も必要とせず今の祖父でもじゅうぶん達成できるのだ」

「これからは、過剰な足し算の介護を行うのだ」

「柔らかくて甘いおやつという目先の欲望に執着する人だからこそ、目先の苦痛から逃れるため死にたいと願うのだ」

「目を強くつむり無数の皺が目頭のほうへ寄るのを見て、健斗は少し苛ついた。あくまでも受け身か。戦争を経験した人は忍耐強く思慮深いような、ましてや特攻出撃間近だった

人なんかは現代人には想像もつかない悟りを開いているイメージまであるが、それは幻想なのか。目標をやり遂げるために努力するという、自発的な覇気がまるで感じられない」

「本当の孝行孫たる自分は今後、祖父が社会復帰するための訓練機会を、しらみ潰しに奪ってゆかなければならない」

「三〇にもなっていない己の衰えを情けなく思ういっぽう、健斗の気持ちは自分の恵まれた点を再発見できた喜びで明るい。そもそも自立歩行できてるじゃないか、俺は。祖父がなによりも嫌がる階段の上り下りを、こうしていとも簡単にできてしまっている」

「痛みを痛みとして、それ自体としてしかとらえることができない。不断に痛みの信号を受け続けてしまえば、人間的思考が欠如し、裏を読むこともできなくなるのか。だからこそ痛みを誤魔化すための薬を山のように飲み、薬という毒で本質的に身体を蝕むことも厭わない。心身の健康を保つために必要な運動も、疲労という表面的苦しさのみで忌避してしまう。運動で筋肉をつけ血流をよくすることで神経痛の改善をはかったりはしない。その即物的かつ短絡的な判断の仕方が獣のようで、健斗にとっては不気味だった」

「実のところ健斗はぼっちゃり体型自体はイケる口だが、ぼっちゃりな身体を作ってしまう豚のようなメンタリティーは心底嫌い、このところそれに拍車がかかっていた」

「甘えきった末に自立歩行もできなくなった老いた人間」

「様々な能力や、それらに必要な筋肉や神経回路がどんどん開発されてゆく。脳も含めた己の全身改造に励む健斗の迷いのなさの根底には、老人を弱らせるのと逆をいけばすべての能力は向上し人生も前進するという、シンプルな悟りがあった。それに一〇代後半で気づければ良かった。悟りを開いた健斗は現在無職だが死にたいと思うようなときなど一瞬もおとずれず、生を謳歌したい気持ちでいっぱいだ」

「考えさせない。祖父が脳を活性化させる機会も徹底的に奪おうと、健斗は衣替えを全力で手伝った」

「中途採用面接にも受からず金もない身であっても、尊い価値があると感じられるのだ。ちゃんと夜に眠れるし、自分で歩けるどころか走れるし、重い物も運べれば身体のちょっとした不具合ならすぐ治る。肌も綺麗だ。祖父のそばにいただけで、それらに自覚的になれた」

「自らの切なる願いを叶えるための努力もしない近頃の甘えた老人は、それこそ軍隊にでも入れて、生きたり死んだりするための身体や精神を取り戻させなければだめなのではないか。生きたい老人には、毎回の食事にありつくために一キロは歩かなければならないと

でもすれば、いやがおうでも足腰の弱りや不眠も治り、余計な予算や手間も必要とせず本人の自立をうながせるだろう」

「見ているだけで未来の自分を馬鹿にされるようで、だから孫に威厳を示すためにも、祖父にはせめて有終の美を飾ってほしいと健斗は思う」

「これだから、目先の優しさを与えてやればいとだけ考える人間は困る。被介護者の自立をうながす立場に立つなら姉も叔父も気安く手をさしのべるべきではない。苦痛なき死という欲求にそうべく手をさしのべる健斗の過剰な介護は、姉たちによるなにも考えていない優しさと形としては変わらないが、行動理念が全然違う。まず出口を見据え、自分の立場を決めてから出直してこいと思った。その点、祖父の自立をうながそうとする母とは介護のスタンスが真逆だが、被介護者のことを真剣に考えている点で健斗には仲間意識がある」

「厳しい監督者の命令下で死ぬほど辛いトレーニングを行うのは無思考の反射行動に等しい。誰にも命令されないのに死ぬほど辛い鍛錬をやる自己規律、精神性の高さでは明らかに自分のほうが勝っている」

「その後、祖父が思い出せるはずもない質問を、健斗はいくつも続けた。記憶を思い出せないという、当事者にとっては最大のストレスを与え脳や身体を萎縮させることで、究極の尊厳死へ全身全霊で向かわせる」

第2章 作品中の表象についての分析--社会的な価値観の投影として

言うまでもなく、本小説はフィクションである。それにもかかわらず、そこに社会的な価値観を投影することによって、本作品はあたかも現実でありそうな出来事を扱ったものとしても読めてしまう。それはどのような価値観であろうか。第1章での分類をもとに考えてみたい。

1 「迷惑をかける」側の立場として

「迷惑をかける」存在としての祖父は、常に「家族のために死んでしまうほうがマシだ」というような言葉を発する者として描かれる。このような意見は、社会に根強く存在している。インターネットのサイト「あなたのブログで日本を変える!! あなたの意見を聞かせてください!」中の「【第6回】尊厳死について<尊厳死を選ぶ派の意見> (1)」(3)からいくつか抜粋する。

「100%治る見込みが無いのであれば、家族の負担を軽くするために、尊厳死を選びます」

「家族の経済的精神的な負担を考えた場合は極力押さえて死にたいので尊厳死を選びます」

「高齢化の時代になっている、現状では家族の看護の負担が余りにも大きい」

「延命治療で家族に迷惑はかけたくない」

尊厳死を選ぼうとする側の理由の一つとして、「家族に負担をかけるから」というものがある。これは、『スクラップ』に出てくる祖父の言葉に符合していると考えられる。

2 「ただ生きている」だけという理由

「健康」な者が「病気」の者を慮り、しかしその実、「健康」な者の視点で「病気」の者を表象する言葉に、「ただ生きている」というものがある。そしてここに、人間として生きる価値の有無が入り込むのである。上記と同じサイトから抜き出してみることにしよう。

「無意味な延命治療はイヤ！」

「特に、生命維持装置で意識も無い状態で延命されるのは、絶対避けたいと思います」

「植物状態でただ人工呼吸器による延命では意味がありません」

「只息をしているだけでしたら早期死を私は選びます」

「重い病に倒れ、回復の見込みがなければ生きていてもしょうがないでしょう」

「意味の無い延命治療によって、スパゲティ人間になるより、「自然」に帰りたいです」

「人間とは、肉体と共に精神あって「ヒト」として存在すると考えます。したがって、すでに精神が機能しておらず、かつ回復不能な状態の場合、延命治療を行うことについて疑問を感じます」

「自分自身で自分の事が判らなくなるまで生きていたくない」

「あくまでもこれから生きていかななくてはならない人間の為に選択します」

身体や精神が自分の思い通りに動かないならば、人間として生きる意味や生きる価値がない、「ただ生かされている」状態である、そのようにまとめることができるだろう。

また、上記1 で見た「迷惑をかける」と合わさった次のような意見もあった。

「人として最低限度の動きが出来るなら延命治療もしてもらいたいが、寝たきりの状態で他人（家族）に迷惑をかけるのは絶えられない」

3 「本音」としての社会資源の「無駄遣い」

社会保障の問題は、「迷惑をかける」相手が家族なのか社会なのかの違いであり、その点で言えば1とも通底する。家族ではなく社会となれば、「誰が社会保障を受けるに値するのか」という「本音」が出てくるのだという。

「医療者の私から言わせて貰いますと。。。結局お金のムダ。家族も最初は延命を望んでも長期戦となればいろいろな面で負担が掛かるんですよ」

「現在の治療は、できるだけ延命させる事が可能な治療です。同時に、その治療費たるや高くてキリが無い状態です」

「関係各位に与える精神的、金銭的苦痛を考えれば、(延命治療は) 行う事でないと思いません」(注釈は引用者)

「自分が生きているのかいないのかわからない状態に、無駄な金をつぎ込む必要はない、と思うだけ」

「税金の無駄使いも、いやです」

つまりは、「延命治療か、それとも尊厳死か」と選択させる場にあっては、意識もはっきりしないと推測されるため、そのような状態にあっては、医療や福祉のための社会資源を使いたくないという考えが見てとれる。

4 努力の称揚と怠惰に対する蔑視

本作品は、生活全般に受動的にならざるを得ない祖父の姿に対して、自発的、能動的であることを望む健斗の姿が描かれる(4)。その対照は、祖父のみすぼらしい肉体と、ストイックに構えようとし「健康」な肉体を目指そうとする健斗との対比でもある。そこでは、「自堕落」な祖父が否定的なものとして描かれ、それに対して若い健斗を行動へと駆り立てる力を肯定的なものとして描いている。本作品では、さらなるねじれとして、祖父の肉体や精神を甘やかせることで、死に急がせようとしている。

怠惰を悪徳であると考えるのは、洋の東西を問わない。キリスト教においては「七つの大罪」のうちのひとつに挙げられている。また、太宰治『懶惰の歌留多』においては、「私の数ある悪徳の中で、最も顕著の悪徳は、怠惰である」とし、「自分でも呆れている」「最大欠陥」であるとし、「たしかに、恥ずべき、欠陥である」と言う(5)。また、現代社会においても、「生活保護を受給するのは甘えがあるから」「ニートやひきこもりは怠けているだけ」という言説があちこちで聞かれる。

5 小括

このように、本作品は、世のなかにおけるこれらの表象の写し鏡になっていることがわかる。つまりは、本作品はこの社会、とくに医療の発達したと言われる現代社会における価値観をきれいに反復していると言えるのである。

第3章 背景と芥川賞効果

さて、尊厳死を助長するような言説がはびこる社会において、本作品が芥川賞を受賞することは、どのような意味があるのだろうか。

受賞以降、著者の独特なキャラクターは、マスコミにおいて重宝されているようで、バラエティー番組や報道番組のコメンテーターとしても著者は活躍している。それだけでも、著者の存在が広く知られるには十分であるだろう。もちろん、このような著者の活躍と著書の内容とは分けて考えなければならない。ただ、著者を知らない人が、著者の軽妙な話術に引き込まれ、本作品を知ることによって手に取って読んでみようという、少なくともその動機にはなるだろう。

小説と社会とをつなげて考えるということに対しては、慎重にならなければならないという向きもあるだろう。そのような側面もあることを私は認める。しかしながら、作品がこの社会において書かれたということは事実であり、著者もまた少なからず社会に影響を受けている。また、この作品が広く読まれることにより、たくさんの人々に影響を与えることも事実であろう。つまり、この小説だけに限らないが、作品であることを越えて私たちの意識を再生産する可能性があるということなのである。

私たちの社会における、この小説が再生産する可能性とはなにか。それは、重度の障害者や患者に対して、尊厳死を奨励するような意識である。本論文を執筆している時点において、第190回国会で尊厳死法案を上程する動きもある(6)。拙論でも述べたが、「この問題は、「誰がこの社会において生きるに値するのか」という社会的な価値を問うものであり、患者の意思決定の問題に収斂させてはならないのである」(7)。この小説が、ややもすれば健斗と祖父との関係性や、健斗や家族の気持ちに焦点を当てることで、「医療や社会保障が充実していれば、健斗も「自発的尊厳死」なる奇妙な語句を用いて、祖父を殺そうとなどは思わなかったのではないか」という疑問が浮上してくることを封殺しているのではないか、とも思えるのである。

終わりに

最後に、少しだけあらすじについて触れておく。結局、祖父を楽に死なせようとする健斗の「自発的尊厳死」の企ては「失敗」に終わる。あろうことか、祖父の「本当は生きたい」という気持ちに健斗は気づいてしまったのだ。いや、「本当に生きたい」かどうかなど、他人にはわかりようもないだろう。「死にたい」という祖父の、その言葉とは裏腹にも思える生への執着を目の当たりにし、健斗は迷いながらも、「自発的安楽死」という名の緩慢な自殺ほう助をやめてしまうのである。

「自発的尊厳死」を実行しなかったことがよいと言うつもりもない。この終わり方がハッピーエンドかどうかはわからない。私には、内容の解釈及び解釈についての論争など、

あまり意味があることだとは思えない。むしろ、この作品が、私たちの社会が「役に立たない」とされる高齢者について、また独力で生きることができない者の「怠惰」への恐るべき敵愾心について、社会の写し鏡であることを私たちは見抜くべきではなからうか。その意味において、私はこの小説は批判的な精神をもって読まれるべきなのではないかと考えるのである。

<注>

(1) 諸事情があり、羽田圭介『スクラップ・アンド・ビルド』からの引用は、『文藝春秋』2015年9月号（kindle版）による。そのため、引用ページ数を書くことができなかったことをご了解願いたい。

(2) 「又吉だけじゃない！ もう1つの芥川賞・羽田圭介『スクラップ・アンド・ビルド』20年に1度の傑作 直木賞・東山彰良『流』、『ダ・ヴィンチニュース』
<http://ddnavi.com/news/249011/a/>

(3) URLは、<http://ameblo.jp/news-think-jp/entry-10013573580.html>。

(4) 性欲に対してだけは、祖父は強いものを持っているように描かれる。こうした作者のジェンダー観も分析の対象になろうが、ここでは措く。

(5) 太宰治『懶惰の歌留多』（青空文庫）
http://www.aozora.gr.jp/cards/000035/files/279_15089.html

(6) 「リビングウィル法案」、今国会に提出を - 超党派議連会長
医療介護CBニュース 2016/02/25 20:00
<http://www.cabrain.net/news/article/newsId/48192.html>

終末期の意思を事前に書面などで示す「リビングウィル」の法制化を検討している超党派の「終末期における本人意思の尊重を考える議員連盟」（会長＝増子輝彦・民主党参院議員）は25日、東京都内でシンポジウムを開いた。この中で増子会長は、「各党の手続きを終え、何とか今国会に法案を提出したい」と述べた。【敦賀陽平】

同議連は2005年に設立された「尊厳死法制化を考える議員連盟」が前身で、昨年2月に名称を変更。現在、衆参合わせて196人の議員が名を連ねている。

国会への提出を目指しているのは、「終末期の医療における患者の意思の尊重に関する法律案」（仮称）。同案では、15歳以上の患者が書面などで自分の意思を示し、2人以上の医師が回復の可能性がない「終末期」と認定した場合に限り、延命措置を受けない「尊厳死」を選ぶことが法的に認められるもので、担当医の免責規定も盛り込まれている。

この日のシンポジウムでは、米国在住の内科医の大西睦子さんと、長野県須坂市の健康福祉部長の樽井寛美さんが、米国や自治体のリビングウィルの取り組みについてそれぞれ講演した。

■自治体が独自にリビングウィル作成

米国では、カリフォルニア州でリビングウィルを認める法律が最初に作られた 1970 年代半ば以降、各州で法制化が進み、今では「尊厳死は自然死という形でとらえられている」（大西さん）という。

ただ、死について話すことは米国でもタブー視され、リビングウィルを持つ米国人は全体の約 3 割にとどまっている。また、認知症を持つ高齢者の増加で、意思の表明が困難な事例も発生しており、大西さんは「米国でも一気に法制化が進んだわけではない。各州が試行錯誤しながら、今日まで議論が続いている」と述べた。

一方、樽井さんは長野県内の須坂市、小布施町、高山村の 3 市町村による「医療福祉推進協議会」の取り組みを紹介。同協議会では、地域の在宅医療の関係者らが議論を重ねた末、2013 年に独自のリビングウィルを作成し、これまで 1800 部が配布されているという。

これに法的な拘束力はないが、樽井さんは「目指しているのは、元気なうちに自分の最期を考える文化。救急搬送の際、家族が『そういえば、こんなことを言っていたな』と思出し、患者本人が後悔しない選択ができるようになれば」と話した。

(7) 野崎泰伸 2015 「2014 年上半期の記事における障害者の生の表象—「新型出生前診断から 1 年」と「尊厳死法案」をめぐる記事を中心に」, 『医療・生命と倫理・社会』Vol.12, 大阪大学大学院医学系研究科医の倫理と公共政策学

http://www.med.osaka-u.ac.jp/pub/eth/OJ_files/OJ12/nozaki.pdf